潮　流

「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」

調査第二部部長　南武志

江戸時代は暗黒の時代だったという説がある。身分制度などの不自由さや18世紀以降の人口停滞などが主張の根拠のようだ。今年のNHK大河ドラマ「青天を衝け」では、主人公の渋沢栄一が御用金を無心する岡部藩の代官に激怒する様子が描かれたが、渋沢は理不尽なシステムの変革を目指し、討幕運動に一旦は加担している。一方で、1人当たりGDPは江戸時代中期以降、上昇率を高めており、18世紀にはアジアでは最も生産性の高い国となった。明治期の日本が殖産興業に成功し、欧米列強の植民地にされるのを回避できたのは、江戸時代に「地力」が養われていたことも一因であろう。

また、江戸時代は庶民の文化が花開いた時期でもある。2020年夏、筆者は東京オリンピック・パラリンピックの訪日観光客を目当てにしたと推察される、いくつかの浮世絵展に出掛けた。東京都美術館は「The UKIYO-E 2020 ― 日本三大浮世絵コレクション」と題し、太田記念美術館、日本浮世絵博物館、平木浮世絵財団などが所蔵する数多くの浮世絵から厳選された約450点を展示した。六本木ヒルズ・森アーツセンターギャラリーでも「おいしい浮世絵展 ～北斎 広重 国芳たちが描いた江戸の味わい～」という展覧会が開催され、江戸時代の食文化に焦点を当てた浮世絵などがテーマごとに紹介された。13年に「和食」はユネスコ無形文化遺産に登録されたが、その代表格の江戸前寿司は江戸の大衆文化が育んだものであり、元々は屋台で提供されたファストフードだったことが浮世絵からも見て取れる。

つい先日、長野県小布施町にある北斎館を再訪した。小布施は葛飾北斎が晩年を過ごした地で、その北斎館には祭屋台の天井絵（上町祭屋台の『怒涛図』、東町祭屋台の『鳳凰図』・『龍図』）などが展示されている。近くの岩松院という寺院には『八方睨み鳳凰図』という天井絵もある。「神奈川沖浪裏」（海外ではビッグウェーブと呼ばれる）や「凱風快晴（いわゆる赤富士）」などの富嶽三十六景で有名な北斎であるが、海外からの評価も極めて高い。19世紀のパリで起きたジャポニスムの中でモネやゴッホらは北斎や歌川広重らをリスペクトした作品を残している。

ちなみに、現在の新型コロナウイルスと同様、江戸時代も麻疹や天然痘（疱瘡）などの疫病に幾度となく襲われた。最近はアマビエ（正式にはアマビコらしい）という妖怪の絵を見かけるが、病除けには赤いものがいいということで、当時は源為朝（鎮西八郎）、鐘馗（しょうき）などを赤一色で描いた絵がよく売れたようだ。

さて、表題は鉄血宰相の異名を持つビスマルクの言葉として有名である（正確には「愚者は自分の経験に学ぶと言う、私はむしろ他人の経験に学ぶのを好む」のようだが）。中学・高校で学ぶ歴史は暗記科目という色合いが強く、多くの人は敬遠しがちで、受験が終わるとほとんど忘れてしまう。しかし、歴史を学び、人類の歩みを知るということは、現代を正しく理解する、または直面している問題に対処する、さらには未来を見通す上で有益である。われわれの祖先が数え切れないほどの試行錯誤をしてきた結果として「今」があるのである。また、過ちを繰り返さないためにも、そしてアフター・コロナの時代を見通す上でも歴史から学ぶ価値は十分高いだろう。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます